

氏名(本籍)	林 圭 史 (鹿児島県)
学位の種類	博士(文学)
学位記番号	博 甲 第 5591 号
学位授与年月日	平成 23 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	地域漁業の展開と伝承主体の生活誌 - 南薩摩・坊泊浦の事例を中心として -
主 査	筑波大学教授 博士(文学) 徳丸 亜木
副 査	筑波大学教授 博士(文学) 古家 信平
副 査	筑波大学教授 文学博士 小口 千明
副 査	筑波大学准教授 博士(文学) 風間 計博

論文の内容の要旨

本論文は、高桑守史が漁民研究において提示し、学界に強い影響を与えている、民俗を生成・保持管理し、変革して行く姿勢をもった漁撈を行う個人、またはその個人が属する諸集団としての伝承主体概念を、鹿児島県南さつま市坊津町における緻密なフィールドワークによって再検討し、今日の生業研究、ならびに宮本常一が民俗誌の記述を深化する試みにおいて構想した生活誌の叙述へのその概念の有効性について検討する事を目的とするものである。

序章「研究の課題と方法」では、民俗学における漁民研究が、生産活動の現場である海上と陸上との隔絶性や、生産の不安定性・不確実性に象徴される漁撈の本質的性格に着目する事で、農民とは異なる独自性を明らかにする事に重きを置く傾向にあり、対して1980年代以降の漁撈技術を対象とする生業研究では、定量的データに基づく精緻な分析が広まりをみせており、漁民研究と生業研究各々の成果を相互に活用し得る段階までは至っていない現状を、学説史の検討から明らかにする。その上で、両研究領域の方法的な接合を図る事が民俗学研究の更なる進展にとって重要な課題である事を指摘する。

第1章「遠洋漁業草創期における地域漁業の実態 - 1920年代の「漁日誌」の内容分析をもとに -」では、1920年代が鹿児島県のカツオ漁業にとって重要な移行期にあたる点をふまえ、3年分の漁日誌を資料として、当時の操業実態を再構成し、餌場と餌料の入手方法の変化が、カツオ漁業の外延化と地域内の漁業管理体制の変化に大きく関わっていた事を指摘する。その上で、地域漁業の展開を考察するにあたっては、陸上と海上、双方の視点を取り入れ、両空間の密接な関連性を視座に据える必要性がある事を論ずる。

第2章「陸の漁民集団 - 漁協とクミアイからみる伝承主体 -」では、従来の伝承主体論において、漁民集団が海上労働に関わる単位として論じられる傾向が認められる事を指摘し、陸上の自治組織であるクミアイも漁業秩序を改編する集団としての側面を持つ事を明らかにし、必ずしも漁撈を結合の原理とはしない、海と関わろうとする個々人の経験や感情から築かれる関係性も存在する事を論ずる。その上で、伝承主体の概念を用いる事により、表面的には漁業地域の衰退としてしか捉え得ない今日の現象を、個人と個人の関係性の変化や新しい縁の現出として捉え直し、水産業をめぐる新たな研究視点を提示し得る可能性を論ずる。

第3章「地域漁業の展開にみるなわばり意識の変容と生成－漁場利用＝なわばりの視点から－」では、生産現場である漁場を、人間と自然との関係性という視点によってのみ捉えるのではなく、漁民の感情的側面である地元の海へのなわばり意識の顕れから捉え、その推移を整理する。その上で、現代のサバ釣り漁業者の漁撈技術と漁場利用について考察を加え、漁師個々の漁場利用が互いのなわばり意識による心理的な緊張関係を反映し、その意識生成が漁撈技術との関連から説明可能な事を指摘する。更に、漁民は法的制度と慣習的制度によって漁場での行動を大きく制約される一方で、自らの選択と試行によって新たな漁場の利用形態を生み出す可能性を常にもつ存在でもあるとし、特に沿岸の漁場は、それを管理する側と漁民双方にとっての「海の意義」が輻湊する場として捉えられる事を示す。漁場利用の推移を、漁業の展開や経済的な価値の消長としてのみならず、漁業の展開に対応して、漁民が地域の海に認めてきた意義の変容として把握する必要性を論ずる。

第4章「老漁師にみる労働への誇りとこだわり－生業研究と聞き取りの可能性再考にむけて－」では、個人に焦点を定め、伝承主体論に基づく視点から地域漁業の展開を捉える有効性を検討する。老漁師の今日に至るまでの半世紀にわたる漁撈経験を生活史的手法によって叙述し、彼の沿岸海域に関する民俗的知識や彼が体感してきた沿岸漁業の変化や漁撈従事歴、民俗的知識への自負が統計的資料からも裏づけ得るとする。漁師個人を伝承主体として捉える事で、地域漁業の展開を、語り手が歩んで来た時間に限定した単線的な盛衰史として記述する傾向にある生業研究の問題を乗り越え得るとし、個人が経験のなかで得た自負、個人的な心情、あるいは同業者に対する感情を叙述する事で生業研究の更なる可能性が拓かれる事を論ずる。

第5章「出漁漁民集団の陸上生活と海上生活－その集団規範に関する考察－」では、日誌記録と聞き取り、および当該地域の漁業関連の資料をもとに、陸上生活と海上生活の集団規範に関する分析を行い、ふたつの生活空間には乖離性と連動性が並存していた点を指摘する。乗組員雇用をめぐる動きと、乗組員構成に関する統計資料を用いて漁撈集団編制の原理を分析する事で、遠洋漁業化が進む過程において、出漁漁民集団の陸上生活と海上生活の間に連動性が認められる事を指摘し、従来の研究における海陸の物理的隔たりを過度に強調した捉え方の再検討が必要である事を論ずる。

第6章「漁民集団類型の再検討－類型指標を中心とする考察－」では、前章までの考察を総括し、当該地域の漁民集団史を再構成した上で、高桑守史の提示する漁民集団類型の有効性と、その応用にあたっての課題について考察する。高桑が提示した漁民集団類型では、漁撈の性格を規定するにあたり、生産の現場のみに着目して指標が設定された結果、海上で果敢に魚族を追うつり漁民の一面が強調された事を指摘し、本論文におけるつり漁民の事例分析をもとに、海上での生産活動が陸上の諸集団や漁業秩序等と相互に関連する点に留意して、つり漁民の漁撈・漁場利用の性格を捉え直す。このように、高桑守史の漁民集団類型に修正を迫った上で、漁民集団類型に加えるべき新たな指標を提示し、漁民研究の成果を生業研究に活用して行く方法を具体的に提示する。

終章「結論と課題」では、伝承主体という概念に立脚した漁民研究が生業研究を深化する上でも有効であり、陸上の諸集団をふまえた伝承主体の把握により、高桑の漁民集団類型論および従来の漁民研究を更に進展させる事が可能であるとする。また、本論文の漁場利用をめぐる研究視角は、個人的な技能の整合性や論理性が前景化しがちな技術研究の欠点を補い得る事を各章の総括を通じて論ずる。更に、本論文を漁民研究と生業研究との方法論的接合を成し得たものとして位置づけ、伝承主体をふまえた研究視角から生業を論じる事で、より豊かな生活誌への展開が可能になるとの結論を提示する。

審査の結果の要旨

本論文は、高桑守史が先に漁民研究上の概念として提示した伝承主体概念と漁民集団類型を議論の中心に

据え、鹿児島県南さつま市坊津町の漁村における著者による徹底したフィールドワークに基づき、伝承主体概念の生業研究における有効性を検討し再評価するものである。本論文は著者による聞き書き資料に漁日誌などの精緻な分析を組み合わせる事により、伝承主体としての現代の漁民と漁民集団とを共時的位相と歴史的位相から捉え、更には、現代に生きる漁民の感情的側面の記述を試みる事により生業研究の深化を図る。その意図は、著者の精緻なデータ提示と分析を通じてある程度達成されたものと言える。一方で、伝承主体を個人と生業集団や年齢集団などとの関係性から主に論じた事から、家や家族など個人と関わる最も基本的な単位との関係性が捨象され、結果として著者の言う生活誌をやや平板なものとしている。また、陸上における関係性を伝承主体に含める事により、その範疇が曖昧となっているなどの問題も認められる。今後は伝承主体概念の更なる検討が望まれるとともに、この概念が漁業以外の生業や人を描くに際して如何に有効であるかを、他地域の調査を通じて具体的に検討する必要があるものと思われる。しかしながら、本論文においては、地域漁業史や各時代相の中での漁民の生活を示す手堅い資料が厚く提示され、十分な検討が加えられている点は、審査委員が一致して認めるところである。本論文ならびに著者の研究姿勢は、学界への寄与が大であると評価された。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。